

日蓮大菩薩真実伝

特36

893

館書圖京東	
函三四	門新
架〇一	部四一
號	類

020083-000-8

特36-893

日蓮大菩薩真実伝

友鳴 吉兵衛/編

M14.11

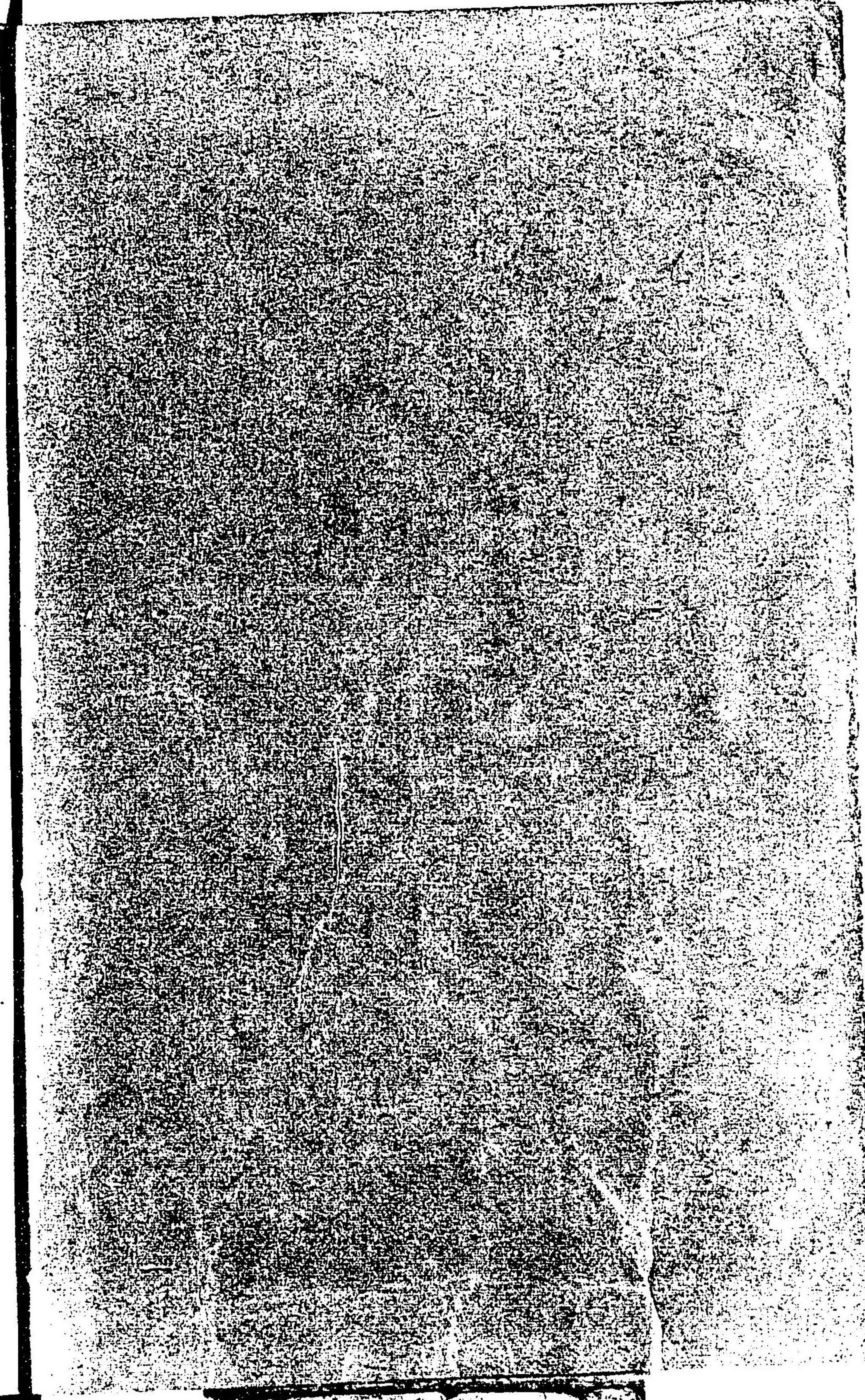
ABH-0285



日蓮大菩薩真實傳序

撰 狐 齋 東 涯 翁

夫法華經大法の妙徳に到てり前に他宗の祖師遠多く世に出諸宗八九に分と雖も獨蓮大士の發
 明又開かれ釋尊の本化を傳へ給ふより蓮大士の法流世々又廣がり七字首題を一心不亂に疑念
 止めて唱ふる者こそ眞の行者と稱へざるのみ名智碩徳數多出れど本化と度する聲雖も有乎經
 文には龍寶の二等あり故に立正安國論又宜く國の法に依て發へ法に人に依て立近年打續き
 る天變地妖末法應時の法華經を諸宗の惡縁に利益顯れず其正法誹謗の罪深く諸天善神の此
 國を捨て守り惡鬼國土に充滿する故也亦金光明經には正法に背き其國に七難起ると見へた
 一七難の起るは是迄顯とれされど二難未だ起らず其二難といひ此國は軍起ると異國より此
 國を攻むるとの二個也亦藥師經の三災已より二起りて猶一個を殘す兵革とて戰の災也尙國王
 百首此法華經を御信用なく彌念佛禪律等の御師依深くば此國の滅亡程近きに有ん是我言葉
 又非ず釋迦牟尼世尊金口の佛說也と遂給へり如斯の諫文を以て執權北條時顯へ奉れ共良



薬口より甘らざるより松葉が草履を焼失り他宗の讒訴強きと以て一度伊豆の伊東に流刑兩
度之佐波の松崎へ配流の難屢なれ共御法の爲とて屈し給えず先々御利益顯之れ轉宗歸
信の僧俗多く陰免解脫病腦速愈海神龍女も御法を慕む本尊曼荼羅真如緯靈驗世尊在世に異
されば佐波の配所も何日ろと赦され鎌倉の地へ歸らせ給へと殆道世の思志召起りて甲州身
延山へ退隠し給ふ時弘安四年辛巳七月朔日蒙古の賊船四千余艘夷狄廿四万余人乘込對州佐
須江浦邊より若船し暴惡一時に對馬を劫奪す茲に於て遠大士の神奇妙言北條家にも始めて思ひ
的り遠大士報國の爲とて日月大曼荼羅の御旗を認められ之を對馬の大將軍へ獻進有嗚呼尊の
哉御旗の威徳又依てさしを丈夫に造堅めし蒙古の賊船四千余艘神風狂可又吹起りて海面荒浪
打轉すにぞ万里の波濤も頼みとなす船は損ねて覆と一艘も殘す海も沈み佛智不思議の御加
勢得たると偏日道大上人は曼荼羅御旗の御威徳也と自是彌宗門榮て身延に御座經凡九箇
年漸御靜泰の時得給ひ若り斯れば正法教化に打廣く改宗海仰の道俗們日々身延山は群參し

て御草菴も坐席を遷げ同年暮秋より普請に掛り新又六丈四方の堂を營み十一月廿四日を以
て開堂の供養を行はれける始て身延山久遠寺と稱す時に高祖御齡六十歳然るに翌弘安五年七
月より高祖の御身も病難癒之種々御保養有と雖も逆御定業の時來りにけん武州池上宗仲の邸
に入せられ十月十三日御入寂し給ふ迄を総て東海房州小湊浦に御誕生有と撰給ふ御一代の
法徳は數々該一冊に詳載し若れば有信の衆人之を緝かば高祖の御教を傳がせ給ふ未法本化
の御恩を知亦是願信の階ならんと其大傑を序と換て附云

告 條

本年高祖六百年御遠忌又付中村福助を始め信者共併優共和築り茲度當開場又於て聊か御報
恩の爲高祖大士法經華弘通の御教難且は御法弟達の孝義貞烈歸依の極越現證利驗を蒙り來
暦に至る迄給て從前の如き狂言俗語の舊風を去り悉皆眞實を主とし高祖小湊又て御誕生
より御一代の曆傳を伎藝に製し近日か修行仕り候間御信心の御方標にと一天四海皆歸妙
法廣普流布す御誓言又漏給はず津々浦々迄も仰せ合され都鄙遠近の御願ひあく御恩思法赴
の開場より永々續々御尊來の程伏て希がひ上奉つり候

浪花道頓堀松町

中 芝居

座主 澤野伏原

○右新狂言の段書順序左の如し

- 房州小港に高祖大士御誕生
- 藥王磨清澄は法堂に御剃髪
- 圓宗守護の三十番神祇山と影向す
- 清澄寺に連長師。道善父母と御對面
- 高祖朝日お向つて初めて御題目を唱給ふ
- 諸宗の惡徒松葉ヶ谷の御庵室を焼討つ
- 篠見ヶ浦に彌三郎大士の必死を救ふ
- 鎌倉御所に大學三郎安國論を辯解す
- 東條景信小松原に大士を失はんと謀る
- 真觀聖人鎌倉に與御殿又高祖を説きす
- 龍の口の御法難は法華經の利驗顯る

- 御赦免の急使袖ヶ浦に行合川の靈蹟を止む
- 明星梅樹又天降つて正法の威力を應ふ
- 日郎箱谷ヶ土罕に大士は手簡を悲讀す
- 高祖激浪又題目を書て北海の風波を飲む
- 佐士の國塚原の配所に日蓮大士御艱難
- 嚴嶋辨財天示現して祖師又本尊を請給ふ
- 北條時宗靈夢に感じて大士の流罪を赦免す
- 大士小室の善智と法を論じて現澄の利驗を顯し玉ふ
- 無曼茶羅の奇端蒙古の賊船を溺す
- 身延山に高祖滅後六百年の遠忌を修行す

頭書目錄

方便品十如

是壽量品

自我傷

陀羅尼品

鬼子母神呪

此經難持

以要言之

日蓮大菩薩眞實傳

浪速 乾坤亭東瀛編述

第一品 祖師降誕幼年より求法苦學と聽聞

夫情惟みれを妙法の至徳日域四隅に法燈輝き高祖日蓮大菩薩化益の御均勞派下の衆庶は云も勿論也渴仰有信の輩は於其御在世の苦辛を感銘し七字首題に相絶て現來二世の抜苦の敬導拜受せずんば有べからず然らば高祖御一代の傳信者に依てり不存を多りり故に古記録撮合なして謹んで事迹を尋ね奉れば上人系譜の遠祖と謂ば大職冠 鎌足二十代の後裔房州長狹郡小湊の住士貫名四郎重忠の四男也母堂と稱原氏の姓にて下総の住人大野吉清の女と云父母一夜不思議の靈夢を感ず其狀虚を彌菩薩紫雲に乗じ空中より來現在すと覺へ御掌に端正ある兒を置汝夫婦佛又善緣依て佛子を與ふべき也是は此一切衆生階獄を濟へる正法弘通の大導師と成徳應の善知識也と正しく示現有と思へば夢は迹なく覺にけれを夢の模様は夫婦符奇異の思ふを倣ける處程なく妻室妊娠有て頃には貞應元年(此年号の頃)鎌倉

方便品

日蓮大菩薩眞實傳

華本文昌堂藏版

三味安詳而
起告舍利弗
諸佛智慧
甚深無量其
智慧門難解
難入一切聲
聞辟支佛
所不能知
所以者何
佛曾親近百
千萬億無數
諸佛。盡行

將軍賴經治世の時代又きて執權には北條三代泰時國政を領る。壬午の二月十六日
午の刻安々御誕生なし給ひける時に異香産室又董り亦小湊の海邊に於て青蓮花十
四本花葉生じ時ならぬ英開きて貫名の庭中に清泉湧出す偏に佛子降誕の奇瑞也是
を産湯の水と爲と云(後人此地に精舎を建設して号を高光山誕生寺と稱ふ) 諸御
幼名を善日磨と号く天然叔才聰敏凡童ならねば御年十二歳の春と云に同國同郡千
光山清澄寺道善法印の弟子となられ未だ御髪は下されね共齋戒淨食禁止を守ら
れ名を亦藥王丸とぞ更め給ふ日夜机上に諸經の繙り螢雪修學一瞬も怠す氣應厚
く万巻を暗誦し博學碩徳の見識を論じ理義を講じて問答すべ々兩葉の梅橙芳し々
も卓見遠ぶ者なん無りける抑此清澄寺と稟す精舎の寶龕三年不測法印と云僧開
基せられし梵刹にて法印自ら虚空藏を彫刻を安置して本尊とあす亦此山を登る繙
三十町往を上人眞筆の石題目碑あり憇て上人御齡十六歳の冬師の道善に剃度受戒
を授り翠の黒髪下し給へり法号を漸長とぞ稟ける日蓮と呼せ給ふ御名は後より自

諸佛無量道
法。勇猛精
進名稱普聞
成就甚深未
曾有法隨宜
所說意難
解。舍利弗
吾從成佛已
來種種因緣
種種譬論廣
演言教無數
方便引導衆

稱へらる變名也是の父母の法名をば併せて恁よそ呼せ給ふとぞ上人一時思慮し給
ふ様凡吾朝第一の宗風開かんよの知恵抄ふての遯ぶべからず本尊虚空藏を所念し
給ふよ知恵の寶珠を感得し給ふ自是倍々穎悟聰敏胸裏に盈溢し竟に正法の要儀を
發究ある曆應元年上人御齡十七鎌倉へ出んと思し召武州程が谷の旅舎に一宿ある
亭主別て堅念佛者にて他の經說を講誦せしかば上人深く説諭を加へらる次大阿
聖と云に隨ひれ習學進て禪律の碩徳に從仕と東西兩義の藹奥を問窮め然して御齡
二十一歳時久々右郷へ歸國し給ひ清澄寺に飯院ありて戒體即身成佛義を著さる
、偕亦再び鎌倉に出入れ松葉が谷に寓居を索め寂山の高僧尊海と云に而謁有て懇
意と成俱に北嶺に伴侶せられ侍台嶺を瞻望し給ふに實に吾朝の天台山也意を澄
して山栖あさば必ず法義を自發せんと東塔圓頓坊に止錫し給ふ亦横川に淨光院と
擲居東西二年月を過さる繙八九年偏に法味を嘗るの外他念を自禁し苦學を旨とし
唯經律論の三藏を眼をさらして御座けるが僧俗共に大志有的は千戸に度て意を研

方便品 日蓮大菩薩眞實傳 二一 華本文昌堂藏版

生。令離諸
著所以者何
如來方便
知見波羅蜜
皆已具足
舍利弗加
來知見廣大
深遠無量無
礙力無所畏
禪定解脫三
昧。深入無
際成就一切

究し物の可否を辨別せざれを發明自得の際に到す然バ孔子を曰絆あり智を致す
物に格る有と宣成哉諸道又通せり其宗流に脚踏入さんば爭衆庶の要途を看出さ
んと倍々心奮勵し給ふ自是台嶺下山有て先京洛なる臨濟宗の圓爾禪師を訪話なし
つ或之宗洞宗の道元禪師に親近して宗風論説を聞給ひ或は泉涌寺園城寺に遊學し
或は南都の七大寺或は紀州の高野山或ひは攝津天王寺次に之河内の蟻長山聖徳太
子の御廟に詣せらる茲又不測の御示現あり再京洛へ歸り給ふに己に御齡も三十と
成せらる京師又名譽の儒家も有は孔孟は徒の講話も聞亦藤の爲家郷に咫尺有てり
和哥の秘決の口傳と受並び又筆法秘事を授り給ひ猶學聽の蘊奧臍堅先んと東寺の
法花堂に參入有て法印眞廣お從仕し給ひ密家の秘書を閱之給ぬ三十一歳の時台嶺
又歸り積學將に成果しけれを最早立宗弘法の期向ふ志願到來しよりけり心裡愈
勉勵し給ふ一夜の夢又諸天善神影向有て贊嘆し給ふ末法有縁の大導師の教化を
待絆年久しけれ吾們正法擁護すべしと御告蒙ると夢看給ふ上人深く信伏し給ひ神

未曾有法
舍利弗。如
來能種種分
別。巧說諸
法。言辭柔
順悅可衆心
。舍利弗。
取要言之無
量無邊未曾
有法佛悉成
就。止舍利
弗。不須復

容一々筆に記止られ諸者又命之て圖せしめ給ふ是便ち三十番神と恭め給ふ恁て上
人三十二歳の御時古郷房州へ歸らんとて序に伊勢兩宮に諸給ふ相の山淨明寺に止
宿有て内外の太神敬拜有に忝くも神勅を賜り御神詠を拜戴し給ぬ
契るぞよ御法の花の春と秋をなじ心に山を守りて
自夫下向に迷われけるが不思議や妙見菩薩顯はれ給ひ法華の深秘を告させ給ぬ衆
人這感擁を視るよりを愈々奇異の思ひを做けるとぞ恁て上人伊勢路を過られ東海
道の旅寢を重ね房州清澄寺にぞ歸らせ給ぬ精舎の側又葺堂を營み其年四月廿二日
よとして法華三昧又鎖扉し給ひ斷一七日の拂曉又臨み法花定を解扉有は崎嶇丘
に攀躋とて旭暎又朝ふて御聲高く初めて南無妙法蓮華經と唱へ給ふ是を誠に本化
迹日弘法の開稱衆生救取の寶號也と末世末代渴仰の信誦益尊伏然也けり上人開
扉と職衆人忽ち多々集む寄む上人靜に諭して宣く夫釋尊入滅し給ふ後和漢高僧智
識世又出世尊の法味弘むと雖も各自分の了解を以て弘法區別して難易勘からず竟

方便品

日蓮大菩薩真實傳

三一華本文昌堂藏版

○ 說所以者何
 ○ 佛所成就
 ○ 第一希有
 ○ 難解之法
 ○ 唯佛與佛
 ○ 乃能究盡
 ○ 諸法實相
 ○ 所謂諸法如
 ○ 是相 如是
 ○ 性如是體如
 ○ 是力如是作
 ○ 如是因
 ○ 如是緣如是

に佛慮に悖れる宗風且下根其を教化也とて戒律不正の宗意を設け滅後の惡趣を厭ぬ勤勞倦年來之を看るゝ忍不爭佛智れ本意は非んや法の縦横の準繩也邪曲も打て直ちに歸せしめ正法又私の沙汰無を以て便ら写けて妙法と稱す是より釋尊極秘の一法俺教方の諸經熟讀して撰抜したる實題目なり現當安穩未來得脫無量の罪科消滅たる緯七字首題に如もの有べからず刹那も速々信受おして唱へて煩腦助かるべしと聽衆の男女へ示し給へば愈其教示世も異なれば多々の孤疑して信する者おく是より更諸宗を評して念佛無間禪天庵真言亡國律國賊と聲を放つて宣ひけるよぞ聽者多分怒人おぞ殊更地頭の平の景信徳と聽より大ら又憤り道善を興せしめて締を謀り密に上人を殺害せんとす茲に法友れ出家け者に淨顯義淨と云る兩僧上人と舊好厚くすれバ潛り危急を告て落しければ上人辛じて瑛道を脱山長狭の青蓮寺と云(真言宗)寺へ舍藏を乞て忍むれざるを檀那何某上人の教化を惡み伎倆て新阿彌陀堂を建設上人を請待して開眼を乞欺計て害せんと企けるを聽

○ 如是緣如是
 ○ 果 如是報
 ○ 如是本末
 ○ 究竟等
 ○ 妙法蓮華經
 ○ 如來壽量品
 ○ 第十六
 ○ 自我得佛來
 ○ 所經諸劫數
 ○ 無量百千萬
 ○ 億載阿僧祇
 ○ 常說法教化

明の上人速々も察せられ害心一句の妙語に説破り災厄無事に啓行し給ひ順風又乗船を索められ相模國米ヶ濱と云に若船有一座の窟窟に席を設け讀經し給ふ緯一七日而して鎌倉に入せらるに當日の天最も早燥して咽の濁くお堪難く上人樹下又憩ふて一唱高く南無妙法蓮華經と唱へ給へ心奇なる哉窟の狭間より清泉突然として湧出る地名は名越松葉が谷也上人鎌倉入錫有て題目始めて口稱し給ふ正法興立の往迹也けり自是這地に閉居を卜られ道俗男女に勸説し給ふ然るに建長六年正月元且(上人御年卅三才)勿躰なくも日輪れ中に明皎愛染明王拜れ給ふ亦同七上元より十五日十七日に至て月輪の中不動明王拜れ給ふ六月廿五日の早且上人手自ら愛染明王を圖して給仕の徒弟に授け給ふ偕同年十月の中旬又到り上人一夜は夢の中一夫俄爾又雷一聲響ら彌り本堂の前に墮ると看給ふ其翌朝平賀有國の子息吉祥丸恭向して上人又見奉り師弟れ契約を結ばれり上人吉祥の相貌御覽して御歡び有て宣ふ樹後世日蓮を翼けて法脈を傳へ宗儀を廣く盛にせん者

壽量品

日蓮大菩薩真實傳

四華本文昌堂藏版

無敵億衆生
令入於佛道
爾來無量劫
爲度衆生故
方便現涅槃
而實不滅度
常住此說法
我常住於此
以諸神通力
令顛倒衆生
剛近而不見
衆見我滅度

將に此兒の器量に有ぬべし噫未頼母し、と賞美し給ふ吉祥丸十六歳にて得度し其
名を日朗法師と稟す、該僧也康元元年十月上旬松葉の草廬を訪ふ者有夫深志れ
的之千里も苦とせず又薄義の間は合璧も疎し茲又天台叡山の學僧に名を成辨と云
的有しが其學處上人に似ざるを以て別懸る尊海より紹介し此度鎌倉へ遠足せ
しむ上人快く止めて弟子とし給ひ其名を日昭とを號けらる、去程に其年上人思
ひ立てて総州地地に入錫せんとて若飾れ浦まで便船に乗る船中に兩儀率たる侍士
あり其名を富貴五郎常忍と云互に同船雜話と述び常忍何心なく問て曰く聖は鎌倉
松葉に御座となん然らば定先て御存し成べし近曾那首に日蓮と云實僧住て七字者
題の名目云立念佛勿論他宗を嘲り自修獨立と莊説ならでは現來救助得難しなど、
高慢我慢の勸めを云觸し愚民を惑ひす甚しき由以の外の不埒ならずや聖も渠を一
面し給ひん甚麼思召る哉と問上人莞爾打笑給ひ命せし如く貧道知只也併況中
生す蓮之麗く万人に度る孔方之穢さか如く在來の宗門も僻言多く淨めて遣ぬ

廣供養舍利
咸皆懷戀慕
而生渴仰心
衆生既信伏
質直意柔軟
一心欲見佛
不自惜身命
時我及衆僧
俱出靈鷲山
我時語衆生
常在此不滅
以方便力故

孔方又似たり宗祖は其意を了解すれ共傳承の僧侶之を過つか破戒犯罪の凡夫たり
其口稱懈怠非ざる的と五逆十惡を造たど共歸命口念の功力を以て罪業消滅得る
と勸め小惡を盡て佛を憑み法を犯して佛又媚る阿諛を以て信又換るは釋尊深く忌
給ふ處也亦泥中の蓮と看給へ一心清淨に打傾けば再泥土の穢さに復す遂に佛座の
蓮臺と成是正法成道は因證也日蓮勸る處の題目の扶桑未發の要法にして濁世機應
の經宗なれを他宗の嫉の理也と演説よどみなく宣むけるよど常忍心又感察な
して偕に該旅僧より日蓮聖徳る值遇は結縁也と自是入門信者と成着船の後伴侶歸
りて中山の別莊「中山の行徳舟橋の間有」に請きて鄭重す上人御入寂の後出家
して総州中山寺の開山と成富貴日常と稟せしは此人なり

第二品 法敵上人又屢迫る妙經奇瑞の聽聞

去程又上人鎌倉へ歸り給ひ、情時勢を考察有に今や澆季淘亂は世體にて五常大綱
稍廢失せんと爲則必ず自害叛逆難とて父子同胞親族の同士討或は他國侵逼難と謂

現有滅不滅
餘國有衆生
恭敬信樂者
我復於彼中
爲說無上法
汝等不聞此
但謂我滅度
我見諸衆生
沒在於苦海
故不爲現身
令其生渴仰
因其心戀慕

乃山爲說法
神通力如是
於阿僧祇劫
常在靈鷲山
及餘諸住處
衆生見劫盡
大火所燒時
我此土安穩
天人常充滿
園林諸堂閣
種種寶莊嚴
寶樹多花果

て異邦より吾朝侵掠の難あり殊に近年凶作續々加之疫癘天下に妖行し人蕃道路に斃れ絶す焉鳥其完を争ひ喰め正に是墮獄現報の形勢淺狭しく嘆としやれ是偏よ予が正法を蔑よし邪法の如く疑ふ謂也と轉心に嘆りせ給ふより苦辛を徹して一卷の書を綴り書名を立正安國論と題玄文應元年春三月の丙午大學三郎と云人へ御談合有て最明寺時頼へ呈上し給ひ翼く之万民安全思し召し禪律念佛等を止め給ふべし佛道邪法と紛るが謂王法も亦自然と亂れて不祥妖孽連年に生じぬ唯御賢と覽の程仰ぐにみそと憚る辭な言上し給ふ該辭世間へ洩聞へしかば諸宗の僧俗大きに憤りて徒黨を企幾千人とも知す松葉の草廬へ亂入なまて上人を殺害せんとぞ閃らける御弟子能登公を始めとし檀那なる進士太師以下力と戮して防戦なせ共惡徒多勢又手痕を被り背方の數へ上人躲れ虎口の難を救い奉れり惡徒們倍々暴激募り草廬を火を放て焼立ける上人密に數を出家し有て二丁計に相隔とある崑崙の裡に匿れ給ふ惡徒們之を氣着さりしは御運芽出度辭にぞ有る惡徒們飽す

で亂妨なして愈々家路を立歸り上人は静に法華經誦して御座志慮不思議や一匹の大猿窟の口へ走と來と一聲略と叫びけれを這谷那嶺より數多の山猿飛つ潜りの蒐聚りて頃しも秋の季也しかば樹々に熱せる菓の類を手に手に捧り持來りば、上人の前に踞踞禮拜之を供養し進の辭都合三日三夜又遊べり上人餘り又不思議と思せば洞の裡を看廻し給へば山王權現は祠有けり諸を猿の供養受しは權現子を恤まれしかど渴仰恭伏なし給ひけり愆て後亦総別を遊化し給へば富貴常忍上人を迎請して中山に堂舎を營建し上人の居院と定先數日説法を行ひ給へり此堂舎より行程二里隔千足村と呼鄙村あり茲又一箇の池塔ありけり池中又栖る女神の有て上人の高徳を感慕えけるや大驚あけたる婦人と化し上人説法の膝下に詣拜乞上人自筆に本尊を乞上人快く圖して與給へば頂戴おして立去りける該四邊には看馴ぬ婦人何地へ歸るや看届けんとして閻俗們後徒往看れば彼千足村の池邊お到りて其容体忽ち接消は如く上人認め與へ賜へる彼本尊の汀に立る

衆生所遊樂 諸天擊天鼓 常作衆伎樂 雨曼陀羅華 散佛及大衆 我淨土不毀 而衆見燒盡 愛怖諸苦惱 如是悉充滿 是諸罪衆生 以惡業因緣 過阿僧祇劫

櫻の枝よぞ釣下置たり上人婦人の法名を号て妙正尼と授け給ひしより自是此池の
名を人皆呼て妙正が池とぞ稱へ傳ぬ櫻樹の側は神を建て妙日大明神とぞ崇光尊
ふ是痘瘡の守護神たるとし中山寺記に詳細記せり楮亦上人は御躬の上と思ひも奇
ざる殃難罹りぬ先達て鎌倉の悪徒們は仇を報はんと爾幼起す嫉みの擧動爾張本た
ると北條武藏守長時おれば執家一族谷ひ又便なく利へ討得ざりしを無念に思
ひ弘長元年五月十二日俄又上人を召捕へて伊豆國伊東へ流刑と定む上人を問し
食つ、嘆息して宣ひけるを噫思成哉論すべうらす興法化益の機應と臨は邪言佞言
よ道を塞がれ罪なを配所の月を觀る緯法華經故おれば厭ふ又足す遮莫法毀法議の
徒の隋地獄の苦思こそ哀むべし抑法華を誹謗なす者は釋尊の玉體に痰付る如く
大壁不赦の罪人に陥り一門一族滅盡せん緯冥罰遠からずと知べき也日蓮再赦免
の日に遭は因衆に面會なすべ者れとて竟に貶解に乘迂り給ふ從隨ひたる御徒弟達
には僉儀際々で慕ひ参り御衣の袖に打廻りつ、別離の悲哭は伏沈みて俱に配所へ

不聞三寶名 諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身 在此而說法 或時爲此衆 說佛壽無量 久乃見佛者 爲說佛難值 我智力如是 慧光照無量 壽命無數劫

將て給之れと日昭日期日興の三僧と守護有司へ歎願おして乗船給仕を乞と雖も船
津一に之其例なしとて敢て望みを聽入す早出帆の順風也とて上人護りて窓を鎖し
繩を解き錨を抜真帆十分に風含ませつ、瞬く間に波路を越り間遙く隔りけれ
ば三僧始め徒弟の衆人浪打際に跌りなして暮ひ歎けは濱玄鳥の啼音も専憂を添る
七難八苦の海の上聚散離合の愁世は様余處の視る目も痛くしかりけれ
第三品 上人御奇瑞祈雨並は竜の口御難聽聞
往昔より和漢聖賢の躬を説毀偏執の雲を蔽ふに到り明慮至誠も誣語も支られ不思
議の患難被る、緯今よ始先ぬ世の習ひなれ痛はしや高祖大士御法の爲に流人と
せられ屋根洩る月も影闇さ阜月の空の寢覺の床は山嶺魂のみ事訪へとも愁を去る
、便とみらで伊豆篠波は浦に御座る然るに地處の守護職なる伊東朝高と云る人
俄に發狂の病を煩ひ藥劑祈禱も効驗あらねば便ち上人に乞て加持を懇ひよ上人異
議なく諾を給ひ齋戒有て祈らせ給ふに即日狂病平快又速く著明法徳看るよりし

久修業所得
汝等有智者
勿於此生疑
當斷令永盡
佛語實不虛
如醫善方便
爲治狂子故
實而言死
無能說虛妄
我亦爲世父
救諸苦患者
爲凡夫顛倒

實而言滅
以常見我故
而生憍恣心
放逸著五欲
墮於惡道中
我常知衆生
行道不行道
隨應所可度
爲說種種法
每自作是念
以何令衆生
得入無上道

て一族擧つて尊信仰慕し爾御不自由を貢於進す逆隣者と過し今日と暮し暮れ秋楓
交々年迂りて弘長を三年の春を迎ふ上人如月十五日と云に釋尊涅槃の當日ありと
て海に向ふて一心專修に壽量品の偈を誦し給ひけるが一個の老翁忽然と出來り上
人に向つて告て曰々三年の苦辛喚倦給ふらん必ず不日又救免有べしと云かと視れ
ば翁の姿は忽ち金の幣と變じて虚空遙く飛失ふけり是全く祖廟春日大明神の護法
を垂る神告ならんと上人殊々歡び待せ給ふ果して自夫幾程もあく執權時頼京都へ
奏上して日蓮赦免狀を下し賜ふ高弟日乘法師取物も把敢ず免狀持て豆州に立立し
上人は拜謁して嬉し涙よくれ片時も御師府然るべうらんと勸め稟して供奉ふし鎌
倉松葉が谷へ立歸り草舎を營み止住去給ふ恠て大學三郎夫婦來訪し上人は歸依し
て御力を添時又文永元年秋八月久々安房國に歸郷在し允考君の墳墓に吊参し且母
堂をバ訪奉りて久く別遠の情を慰問し給ふ母堂は該時齡七十歳にて御親子面會を
給ふ間もなく卒爾と病て逝去ある上人別えて驚嘆し給ひ庭なる古松の下に壇を設

け謹んで祈念して宜く予弘法必ず世上行はれなば慈母速に甦命せしめ給へ尙開法
の功空廢たらば甦命の祈望も詮無るべしと神呪を持し加持水を以て母公の唇へ灌
ぎ給へば立地息吹轉して健康たり壽を延る緯自是四年庶人之を視て感實信伏し
權述の奇特と云ざるのあし時又其頃房總兩州にて疫癘大い流行なして死亡患
腦傳染多く衆庶上人の法徳消除を乞上人自ら往て白布を出しめ經題を書して海へ
投じ船に乗せて海上曳せ疫鬼を送らしめ給ふ或ひは妙符を書模寫て井中へ浸し
て其水を汲病患の者も服用せしむに愈立地に平快なしけり九月の頃花房蓮花寺
へ入錫有て廣布の爲宗經一卷を著し給ふ翌十月法印道善來訪有て開立法問數り條
又速び是を懇論に説示し給ふに道善師も其化導を歸せらる、茲に男金買信と云人
の男上人に歸依して剃髮し其法名を日向とを賜りける此僧も亦身命を抛て給仕
勤行怠らざりけり去程又文永九年の陽まで上人安房國より止り給ひ西條青蓮坊許に
在せし處同國住人東條左衛門景信なる者別て念佛宗の偏頗なれば上人の弘法と深

速成就佛身
此經難持
若暫持者
我即觀喜
諸佛亦然
如是之人
諸佛所歎
是則勇猛
是則精進
是名持戒
行頭陀者
則爲疾得

く惡みて來て難問を仕懸るれ共上人の返答滯滿おければ景信心又悔し忍難く此
うへは處詮舌論無益なり彼法師を討取外あしと邪念を起して黨を結び上人通
行ゆる路條の小松原と云處に埋伏えて不意弓箭を繼へ懸太刀拔りて斬立けれを
浩るべしとは露座知給はず生憎御從者も微ければ主從慌忙して逃途迷ひ防かん
方術も無りざるも御弟子鏡忍坊日曉の哀れや當座討倒され死す上人も御頭
上は痕を負危急最も逼至り臨みて當處の地頭工藤左近之助同く左藤治徳と雖より
葦駄天の如く駈來りつ、敵徒を防ぎ戦ひられ共多勢無勢抗拒し難く竟も兩士を
深坑を負て上人諸共暗夜に紛れ這々一が坂と云處へ退き必死の大難遭れ給ふの佛
神擁護の權化の高祖尊くも亦有難かりられ東條の愉快とて喜び居けるが佛罰法敵
の惡報通れ難く幾日と立す亂心と成苦哭して暴狂ひは、頭八裂とて汗ひ死しけり
是なん法敵の現罰よて世の禁戒と恐るべき也上人稍停一が坂の洞窟に匿れ手痕を
保療し給ひざるが揚枝を隨て筆とし給ふ一が坂の圖を摸寫さきて真中よ本尊を書

無上佛道
能於來世
讀持此經
是真佛子
住淨善地
佛滅度後
能解其義
是諸天人
世間之眼
於恐畏世
能須臾說
一切天人

し給ひ弟子衆へ授け給ふとある該洞窟は潛み給ふ緯三七日自夫總州花端へと趣り
れ密家の僧を弟子とせられ名を日正とて呼び給ふ徳で常陸國へ廻歷有て免波の
嶺へ攀りつ續ひて下野那須野へ距離一里許り御疾病の有るより湯本の温泉に浴
し給ふ該處を距離緯二里許り高德大原と呼村の野に高さ五尺余の巨石あると上人
御覽して贊賞在し石の末代不滅の基礎也永世教化の題目選して弘法の佛縁結は
せんと七字首題に御名を記し石面深く彫入給ふ今に彼處に遺跡と成て御徳に
現承なし有り諸大原より北西の近村に藤原と稱一郷あり該處に里正治郎助と云
者頑愚盲昧の性質にて未來の報土はかして看破り現世現報の外おはす杯と唯強欲心
に募り居たるを上人哀憐て教諭を加へ法華妙法を説示し給ひければ治郎助殆感
悔なむつ、自は無二れ信者と成て傳る宗門改轉して歸依佛の禮那となりぬ次に
宇都宮北は妙金を度し城主の姉なる妙正を教化し再下結し歸外給ふて法華堂よ
説法し給ふ刻日保日家を弟子となす文永四年上人御歸も早四十六歳とせ給ふ

此經難持

日蓮大菩薩真實傳

九一華本文昌堂藏版

皆應供養
以要言之
如來一切
所有之法
如來一切
自在神力
如來一切
秘要之藏
如來一切
甚深之事
皆於此經
宣示顯說

處余年八月十五日、到り母公竟、逝去し給へば上人、御悲泣甚しく、是が爲に霜月廿四日、母公の百々日に當るを以て天台會を勤修せられ、亦十二月月中旬に遷びて、總州市原郡笠森、往(坂東三十三所)願禮札所第三十一番目(觀音堂)に籠り給ふ其隣り村墨田と云里、高橋五郎時光と呼士あり、其夜の夢、觀音枕土に現之時、光、示して宣く、予今堂中に高僧を得たり、汝之を速に迎請なして、鄭重して正法を聽聞せよとて告蒙ると、視て夢を覺たり、時光、聖朝笠森に歸看れを果して、上人、觀音七給へば、則り供奉して立跡り、大いに尊敬なし、進し、長柄郡藤原の邑土、ある齋藤家綱と云る人も、深く隨喜して、藤原村に一字の精舎を建設して、上人を請待し、說法を聽聞、該寺号を常在山妙光寺と云、時に文永五年六月、上旬、上人常在山の絶頂、又登り妙法廣布天下、安全の爲、朝日、向て御所念有、粹一七日の圓專修し給ふ、然るに第三日、目、當れる鳥異形の龜池上、又浮び出汀の松に向ふて、氣を積けるが、松樹忽ち龜甲の交を浮め、翠の色も一入彌増りけり、後人此松を號て龜甲松と云、上人の御詠歌に

○妙の名の八卷心かり、又限りじな松をさくら當意即妙

若經卷
所住之處
若於園中
若於林中
若於樹下
若於僧坊
若白雲會
若觀音堂
若山谷曠野
是中皆應
起塔供養
所以者何

該時、日頂日觀妙光寺、又て出家得度、致され、若り上人、自是、展、東海、又飛錫し、當夏、大いに早魘なせむ、官より命令下りつ、鎌倉極樂寺、真觀上人へ、祈雨潤澤を請念たらせむ、上人之を聞し、召され、其徒、入澤周防の兩個を招ち、上人兩個へ、宣ひ、若る様と、予年來、真觀上人と法問を競ふ、翼くは、風雨を以て、輪藏を、決むべし、倘、真觀上人の法雨、盡七日に、まて、降雨潤水の法驗有ば、日蓮が宗教妄圖なるべし、亦降ざる時は、真觀上人の持律、悉く是妄誕ならんと、兩個、若者へ、棄法遣れ、若れを、入澤周防は、之を聽たり、直又往て、真觀に告ぐ、真觀、喜んで、僧徒百餘、聚りて、丹誠、徹して、祈ると、雖も、五日、水到れど、曇氣もなし、真觀、心慌忙て、安からず、更に、亦多寶寺に、僧徒を、教、白、願、招き、加へて、彌倍々、祈念に、他事なく、竟も、七日、満ても、雨降らず、高祖、上人、真觀の、許へ、使僧を、立、祈修を、誥て、宣ふ様と、小町、雨乞の名歌あり、亦和泉式部、能因、們も、一首の和歌、又て、雨を呼早鬼の、憂を救ひたる、又上人の、行法、奚ぞ、集、們、不、逮、さるや、小雨、僅も、敷、さる、粹、行、法

當知是處 卽是道場 諸佛於此 得阿耨多羅 三藐三菩提 諸佛於此 轉於法輪 而般涅槃 一切業障海 皆從妄想於 若欲懺悔者

行力頼母しからず尙後世の一大事に於てをやと命せ遣し給ひけれ共其親一言の 答も出す之に於て上人翌日官へ願はれ御弟子兩三個奉具せられ靈山が峰と云處 へ到兎を誦し題目高く唱て且薄板に經文を書附之を教多海中へ投し師弟諸念は讀 經有るよ立地晴天黒雲蔽ふて電光霹靂 頃も度と暴雨車軸を流すが如し衆庶駭奇 特を味るよりも涙を流して感伏るし乳味又濁へし嬰子の乳房を搦れる喜びあして 枯んとしたる稻の穂も立地青みて實を熟せバ田夫は鼓腹の舞歡びに看頭木敷も南 無妙法の七字を歸する于爾益會十六日の亡者よとも百性淨み上ると歡びけり自是 して極樂寺良觀に己が行法の到ぬを思ひ十願に高祖を惡み立て多寶寺行教を語 合官府へ讒言を敷き出する様日蓮辭 屢重時君時頼君を以て墮獄の人と唱へ 加夫 建長寺極樂寺を燒拂ひ諸僧を害して之を鼻首とし専ら自宗一般せしめん杯と説訴 逞しく偽設けて意趣晴さんとぞ訴へ出ぬ依之八月廿日上人を公廳へ呼出され 諸僧の出所實也やと問上人之に答へて宣く貧道先達く建白奉る便ち安國論に述る

端坐思實相 衆罪如霜露 慧日能消除 當知身上一 念三千。故 露道時稱此 本理。一身 一念遍於法 界 迴向文 一天四海 皆歸妙法

處の一個も虚談の侍すと答へ給ふ官府倍々上人を憎みて日蓮の辞を佛法に假託國 家を遣さんとす逆僧也實は死罪の處置に當るべし屢々之を行へとぞて續く續く 準備は遠ざけれける借上人は名越の庵室に歸り官府の評決如何有んと心算に思慮し 居給ふ處は紛亂する経路道を盡き朝僧の族も感はされたり捕兵を以て御座す不 意に押寄把國みたり上人一向に驚き給はず捕兵は驚つて宣ひける様日蓮は是日本 國の佛也其礎を壊らば家を保たんとや情を感ひざる哉と宣へば捕兵は小頭若 大輔木間辨八何餘廣言聽暇有んやと小石を擲みて上人へ投擲飛懸つて袈衣の袖を 引張廣庭へ曳下し奉り懷中なる十卷の經文摺み出したる余一巻を繰上上人をば勿 なくも散々に打屠殘る丸卷の弊敵を踏したる床の下廣庭に布敷して痛ばしくも上 人を引立立出る是を墮地獄の釜焦罪淺猿りある事難也信て介鳥の申の刻は鎌倉 の地を出し奉りて小路々々を曳度中絆恰も朝敵の刑人を懸す如し無愆至極は親 ひ也免自是竜の口へと曳持行御首を刎べしと風話有るを曉又文永八年九月十二日 也最も御弟子日期以下を土の罕よを押籠らるゝ其夜上人は竜の口に於て斃果せん 若宮に到る上人馬より下りて鶴が岡の宮居に向むて遙拜し給ふ由井が漢が對

後五百歳
廻宣流布
願以此功德
普及於一切
我廣與衆生
皆共成佛道
妙法蓮華經
陀等尼品第
二十六
伊提履一
伊提履二
羅提履三

て馬を止光使を四條氏又遣とされ長く別れん絆を告給へば四條氏の同胞四個懸來て行方の道筋送り看立つ共に殉死せんと望まれける情亦茲に三個歿老樂を常と深く御法に歸依し上人不應れ死罪を聽より情痛しの成行やと思へば御余波嘆き惜みて餌を盆に乗て出來り此世の御別れとて供じはれ上人感實有て之を受給ふ其夜も既と曉天近く竜の口刑場まで着せ給ふ依智直重と云者刀を拿已に上人の御首打落さんと見とたる刀の電光不思議や其太刀物にも障す忽ちボツキと三段又打折れ彼方の地上へ飛散たり驚く直重猶懲すまに太刀拿替で斬んと做に東南の空より澄光物星の飛來る鮮麗の如く直重始め歩卒の者們眼射られて成たのまはす直重仰さまに撞地倒れ身軀壓又打る如去歩卒們一同辟易して倒るる有難るも有て刑場警固の者看へざりけり當時に當て執權の館にも怪異の形勢等も起り棟上は鐵砲を呼つて曰く今誤矢も聖者を害はる國家滅亡せし線近からんと館中響き度つて聽へければ重時父子是を聞て大さる驚き使者を馳よせ上人を救命す使者急いで竜の口より走る依智直重們より不思議の次第言とせんとて使を飛打兩使七里が濱まで行達余地を今に行達川と号し直りば秋葉狀と以て平左衛門尉と建じ上

阿提履四
伊提履五
泥履六
泥履七
泥履八
泥履九
泥履十
樓醜十一
樓醜十二
樓醜十三
樓醜十四
多醜十五

八十死一生を遁れ給ふ此時呪を念じて御袈裟と松の小枝と掛させ給ひ諸天を禮拜有て必死と臨む擁護を深く感報し給ふ○凡松樹を袈裟掛と稱する物高祖御遺二四か所あり一又竜の口二に房州東條三に佐渡一の澤四に甲州休息之を四條の名樹と尊ぶ然程に上人の恙なく竜の口の刑場を退き給ふ夥衆は武士又奮固せられ同國依智の郷本間六郎左衛門尉重運が許し護送せられて入給ふにけり既此介夜ハ文永八年九月十三日の絆にぞ有ける玉兔明皎又四方を照し數十人の番兵們と大和居列て護りけるが平日に強々惡みし上人を昨夜の奇瑞も看ふる物から何方も騎行行季が恐しなま念佛の宗禪真言律今より斷然改宗なして法華妙經に打傾さ上人の弟子は做給はれとて老たる者は拾珠を拿出し破亂々々と斷棄慍愧なす上人之を打着やり給ひやを庭上より下立合掌し給ひ玉兔に向つて自我偈を誦誦し三拜有て宣ひけお様と如何月天字へ奏し奉る元來法華經の法座又列し給ふ明月天又て御座さすや有斯行者の出來りな心を急ぎ悦びをも垂給ふべからん徒餘處又照させ給ふは酒得ぬ危険厄難中より有ながら弘法堅固なるもの殊に不測又侍をすやも言畢給ひぬる奇ある哉天より太白星の如き星光線して庭前に飛下り側なる梅の梢に留宿も看れ

多醜 十六
多醜 十七
多醜 十八
多醜 十九

を忽ち一個の神童と化して我こそ明星天子也とて稍停御話説在まける側なる番兵們之を見て愈一同に恐縮して奇異は名僧やと感伏おしぬ神童元の大星と成て稍を放れて昇天あれば上人自若として座を歸り給ふ自是該梅を星降りの梅と稱へ今れ代までも諸人敬愛せり

明治十四年十月十六日出版御届 (代價八錢五厘)

編輯 大坂府平民 友鳴 吉兵衛

出版 北區天満川崎町第三拾八番地 大坂府平民 華本安次郎

賣 柳原喜兵衛 西京村上勘兵衛
岡島真七 同山宮川源水
松本平兵衛 同阿部勝忠
梅村安兵衛 同田上源吉
富士政七 別所新開店 博多藤井源次郎
梅村爲助 吉田善藏 東京藤井源次郎

頭書畢

日蓮大菩薩眞實傳 浪速 乾坤亭東涯編述

第四品 上人佐渡が島配流並に妙經種々奇瑞の聴聞

文永八年九月十五日再び官府の命令下りて猶も高祖を嫌忌強くて佐渡が島へと遠流の趣ら平左衛門尉頼綱之を承奉り本間重連へ口達なして護送の準備をさせにける上人聞し召て御請有亦書を四條氏に送り給ふ便ち御書の略語に曰く足下嘗て法華の爲る童の口よて該日蓮と死を同じうせんと云る、是自裁して主より報より難を貧道今佐渡に貶適せらるると雖も心を夫畏る、よ足んや衆星已る童の口よ顯之れ明星續いて依智に降る豈日輪の擁護なからんや決して危踏有べからずとて稟し送り給ふしと也恁て十月十日旅發し給ひ十二日間を置て道中有同月廿二日越後國寺泊りの驛に若せ給ふ廿七日境を解て出帆之角田山下に船を寄しが風惡くして碇泊なすよ一個の奇童上人よ乞て曰く該山の中途に一箇の輻完あり七頭の蛇栖て人を害す願くは師の法力を蒙とて之を退治給ひれと思みけり上人諾せられて山に登り磔を拾ふて余石毎に妙經の一字宛を書記して彼窟の裡に投入給へば毒蛇も争佛徳に叶はんや厥後毒觸の害無

日蓮大菩薩眞實傳

一華本文昌堂藏版

りけるどぞ上人亦海邊を看遣給ふ長八尺計りの岩あり上人立寄て筆を染られ一切衆生
結縁の爲とて題目兩度書止先給ぬ墨色岩に染込脱すとなん今又角田の岩題目とて北越隨一の
御舊迹と遺りぬ實又令法久住の御意思今又始めぬ有難かりけり斯と翌れば廿八日今日は殊
順風を得て天と一圓浮雲もあく遠山鮮に晴度りければ船子們得たりと護送吏に訟告て角田
浦邊を出帆なしつ三四里計りも出ると覺へて越後路遙に隔りけるが猛可又東北の空雲湧出
又船子們大に仰天して良に聖珠卷彼風雲よる雨を帯たる對ふ暴風斯大洋に乗出され頼
入るる孤帆をみえ如何はせんと慌忙走廻る間も有るを忽ち一陣の暴風颯と吹來るに風
掃てる青海原の波逆立て小丘の如く動上動下す絆手球の如し風波に馴る船子們すら茲一
事と力を盡して命限りと働さけれ共帆楫の助も逃び難く危や激浪を船も打破さ大洋の水屑
成やせんと一統活たる心地は無し者此時上人艦に立出給ふ法華經讀誦して御座ければ忽ち
海上に衣冠の神靈現れ聖者諸の鮮魚を怒まひ妙徳功力を海に投じて魚衆の苦患も濟む給へ
と望む上人側の棹追奪て海面の荒浪に打對む七字首題を書流し給へば尊い哉七字の象の忽ち

金光明の色を放つて波に在々字跡の消す水の隨意浮みければ船中乗組上下の者も思はず合掌
敬拜なして南無妙法蓮華經と唱ける神靈恣の搔消す如く今迄暴荒みある雨風も何處へも退散
して平地に如く天色蒼々と四方霽度と船も損せず愈々蘇生たる歡びあして上人の法徳著明を
覺ゆる是偏に龍神御法を慕ふ故意風波の暴を起して化益を預る計を成べし○波題目の角田の
海上に在るとして享保年間の頃に當つて同國五箇村出太夫と云者乗船して河を拜すと云亦眞浦に
も波題目有と云按ずるに眞浦と角田とと余里程遠を距離すと云○斯て十月廿八日海路を渡り
て佐渡國羽茂郡なる松崎の浦に若船を給ふ該國の守護本間重連に預らる重連が館より北に當
つて塚原と謂捨骸場有けり之は火葬をする茶肆所也當地又一間四方に草舎を造り無慾や上人
を容置する上人有斯佗しき御栖居も正法弘通の修行也と敢て慈悲思し召す唯朝暮止觀法華經
と眼を晒し或ひの該野邊に土火せられある亡者の爲と題目を唱へ鹿の皮を褥と成し箕笠を
被らて常住座臥とし嚴冬雪夜を凌給ふの聽さへ忍難く勿体なし然るに國人鎌倉の齋を聞上人
を類例なる惡僧と心得供御を擎捧る者をおく適信哀の念有者の密に衣食等を惠供すれば主

有人の勘當を受親有人と強く誡められ樹枯しの吹音ならを哀れ緝訪者もな々殊に陰々たる郊野の三昧讀經の聲而已さへ度れを亡者の幸得て佛縁結び皆共成佛得脱すべし茲又亦阿佛房千日尼と云者有(佐渡國加茂郡又阿佛房と呼寺院あり該尼の古跡也とぞ)鄭重に上人を單り奉りて密に供御を贈り進せおとす夫に引替該國の念佛宗門會々集會つ、商議しけるハ俺輩が宗体を破滅と計る惡法師殺戮すべしと評決して其由を重連に訴ふる又重連制して稟しける様夫の理有て非に陥べけれ渠爾罪に處し難きを以て流罪と定まる法師なれを最も大切にせよと錠意も有違犯の擧止公へ濟す唯宗法と以て挑争べしと諭す各聽て諸僧に觸報し宗徒道俗寄集りつ、更又上人の住處を轉居せまめ塚原より五里計り東一の澤と云地へ移させ彌難面當りまいとせ刺へ三度の御食物すら二椀の外を呈せずとふん茲に阿佛房藤原の爲盛と云者あり該人罪有て當國に販適彼千日尼と夫婦ありけり該尼素の巫女よと有しが三年の間垢離を淨しと有て余日積れハ千日也とて斯は自稱を呼せるとりや該夫婦如何なる善縁や有けん深冬上人を單り進せ密に供御を輪贈奉りけれを上人夫婦が志節を悦び給ふ然る又閻夫此緯を聽

知目代の方へ報告せければ夫婦居處を追拂ひれり夫婦の更な愁共せず猶竊やかに訪進らす
現に有難き信者也けり茲に亦一の澤の實相寺と謂は便ち上人袈裟掛松の有妻地也上人佐渡
ての舊跡と探原一の澤と第一とす偕上人にの倍々勇毅し給ひ法華の至妙説せ給ふも今迄惜み
まいらせざる者も霜雪朝日に解るが如く漸々至妙の徳を了解し傾信の心を催はしける殊更上
人の筆を染られ望める者へ授與給ふ大曼茶羅の露験又於て之誠み神徳不測は威徳あり乍摩曼
茶羅とい天竺の語めて之を翻譯する則より便ち功徳聚とぞ專すなる無量利益含備みせば御
弟子を始先歸順の輩亡者鬼畜は種類までも假し形状を現じて之を乞上人弘法を言とし給ふ
より書して悉く授與せし先給ふ恠て一日の緯也しが年齢十七八計りの婦人容貌端緒として比
類もなき片土に見馴ぬ一個の女湯上人に庵に詣來て望むらく宗教の女人成佛の御法を聽別て
頼母しくこそ思ひ侍るなり結縁に曼茶羅を書寫して授與給てん哉と望みければ上人婦人の容
貌御覽して凡尋ならぬ化人と察し望みよ任せ筆執給へと婦人は上より著たる羅を取置
ば此衣へ認先常住功力被りたまふと云に望みの如く書給ひつ、偕和女の名の何と呼と問せ給へ

ば婦人答へて安藝國嚴嶋女とぞ答へける上人始より化神と察給むしや十界勸請の曼荼羅も
非ず天龍神明の号をも戴せず首題計りよきて年月もな々左よ安藝國嚴嶋女へ之を授與すと書
せ給へり是則ち嚴島辨財天よぞ御座す抑嚴嶋明神と稟し奉るを經文よ依て鑑察すれば將に
八大龍王の妹君也亦神代は御卷に依ては市杵鸕姬の命とあり夫は闇き文永十一年二月十四日
上人配流赦免有べし由執權より下文有ければ日朗法師免狀を持って出立し夜を日に繼て佐渡に
赴ら三月八日の夜半刻に上人幽栖の一の澤なる坊廬へ尋ね若に客れば師弟須更煩し泪よ暮
給む師の恙あるを祝し進せ翌日免狀を以て本間へ達し遂に佐渡が嶋啓行ある念佛の徒は猶妬
笑ども阿佛千日夫婦の者の別離を惜みて悲みける諸波海船を伺障りあく亦越後三郡郡寺泊へ
（佐渡國小木の港より越後國寺泊へ海上船路三十里余）若船ありて寺泊より三日路を経て同
國頭城郡高田は街へ漸漂り若せ給ふ處は一個の老翁出來まの、貴僧の通行待候久し彼首の寺
院へ入給へらしと勸えて先に立案内すれを上人師弟不審ながらも爾も局で動り給へば後宗は
一院へ誘引きて翁は庫裏へ入共看へす忽ち容姿は消失はせり

第五品 甲州化益蒙古軍艦破裂並高祖御入寂聽聞

偕該密宗の本尊と崇むと昆沙門天は尊像也しが今日の前夜の緯也けるが不思議成うな昆沙門
天尊像和尙の枕上に立願れ正しく示して宜ふ様は翌門外通行の旅僧に日蓮聖と呼る師弟子寺中
へ請待せんと思ふ是一宗を開き大導師也汝厚く供養すべしと示し給へば和尙の奇異に思ひな
がらも余心待して居らる、所へ上人師弟入來り給ひ和尙又對ひて稟されけるは俺們通係りの
旅僧也今老翁來れて寺内へ伴侶入老翁の人要事の如何と尋ねよ和尙隔感し入否夫の空く昆沙
門天也前夜箇様々々の告夢有しと示現の次第語りければ上人師弟を深く信伏あて則ち神扉を
開きて拜覽有に天尊の御兩足は泥土付たり老翁と化し引入給ふは護法を示さる神勅あらんと
上人殊も感悦し給ひ和尙の響應一方ならず余夜の當寺に一泊し給む翌朝風よ出立有るが該尊
像今と米澤と云處に代々持傳りりて崇敬なしぬ實に上人の御徳廣大なる諸天善神の敬愛有緯
稟は之中々愚みりけり自夫上人信州の地よ入松代近在過らせ給ぬ又兎有一邑よ次宿給ぬよ佐
野某甲なる者檀那と成漸に歩行て武州兒玉よ到り久米何某は昨に宿らる然るよ這近傍に産婦

有りて殆苦腦又沈みて出産なし其上人に加持を乞ふ上人御座の側に飯杓子あり採揚給ひ
杓子の表へ七字首題を書認められ之を戴すべしと與へ給ふ急於産婦へ頂拜せしむる
べし一呼吸の際より子と安らりし出産なしなり便ち谷中瑞輪寺の本尊是也三月廿六日鎌倉は
若し給ぬ徒弟の衆中拜迎して歡喜雀躍限りなく迷ひ兒の母に遺心地も愈久しき愁眉を開きけ
り恚て其年四月八日上人往て頼綱に恭見給ふ頼綱上人も問て曰く奈古の來冠何れの日ぞや
上人答へて宣ふ様は夫經文は時日を記さず然りと雖も執權邪を信じ正を倒す弊甚だ苛酷
故に天に怒り最も急也之を以て思ひ試る必き年を距ざるべしと未前を察えて演給ひる頼
綱之を執權へ言上す執權時宗（北條六代目）命せて曰く日蓮念佛無問等の法問止なば愛染
堂を城門に西に建築田園一千町を寺領し附之師弟之に安住せしめて永く國家を護らまひへま
上人之を聽し召て宣く貪道偷福田を祈りなば國中に勝法を禁斷すべし也奚俺格を沮む望望
んやと時宗之を聽て感じて曰く日蓮は實に生佛也と該辭を朝廷へ奉上一て感狀を乞ふ奉りけ
れば依之五月二日護法は縁を賜りける○頃年度々興法の威力御感最も深し三國とも比類な
れ

妙宗後代有難き尊僧何宗ら之と比せん乎日本國中に於て宗を弘る弊妨げ有べからざる者也
仍て執達件の如し文永十一年五月二日 上人是を奉て悦び給はず官人偷賣し歸依して下章
を賜る物ならば奚三類を禁する辭を情知らんや偷誦依せずして賜はるならん阿諛也甚だしい
哉鴻季の人情正法演ても化度し難し三度謙光て容ざる則と身退くは是道也と云如し現臨すべ
しと思入れれば甲州の南都氏へ向て思召處を云送り給ふ自是願に退隱思ひ立給へる信仰
の輩上人を勸めて已が領地へ來させ給へど我一も棄し上ると雖も上人更も賜入給はず只甲
州身延山へ往ん連同年五月十二日發足あり十七日甲州南都へ到り給ふ南都氏出迎へて尊敬有
身延へ精舎を營建と請ひれ給ふ上人固く辭し給ふにより假し草堂を建て客奉りぬ茲は同國巨
摩郡小室と謂處も善智と呼ぶ修験者有し夕専ら行力を揮ひて世に鳴上人一日日興日節を從へ
小室に到りて花籃と給ふ善智法座を來して上人も對し種々難問を法華を結る上人言す
説破し給ふ善智心に殘念にや思ひん此上と双方法力競んと望む上人其望みに應じ給ふ善智
いらだか教珠を揉立祈り出せば五圍繞も有大寶石を庭前より空に釣上げ、上人の頭頂へ落係

らんとし看人肝を冷て恐怖する時上人驚き給えず一偈を誦して合掌われバ忽ち歸へりて善
智が頭上に墮落る善智玉の汗を拭き返せと彌 磐石落下らんとす善智達一々伏て佗はけれ
バ彼石原の庭前へ落下せぬ得の善智を敵對難く恐れ入てを逃歸りけり茲も亦相模國葉吹と
謂地あり小田原より函嶺へ登る坂口也該處に象鼻に似たる石あり上人這石へ腰を掛給ふを以
て往來貴賤結縁の爲石に題目を刻み今猶那首に顯存たり亦甲州山梨郡石和川は世に余名
も高き經石有石毎法華經一字宛石の面に書給ひける唐北消世に遺りたる由來を正し尋
ね看れバ其頃該石和川の側に住む鶴飼の勘作と云者あり老母妻子を養育なせられ其身貧なれ
バ思ふに任せず川稼さも漁些とよとして石和川は殺生禁斷なれば魚聚る鮮夥しを以て勘作
不斗惡念兆して法を犯して夜々毎に鶴を遺つて魚を把しを處の目明役看留られて分解立ぬ
の縲紲係り竟に禁獄と成て死刑に畢る最も無愆の次第なれば上人之を聞し召哀れと思され
弟子衆を卒て石和に到り岸邊の小石を多く拾ひ集め自ら石毎法華經一字宛書記せり河へ
投入師弟讀經有て吊ひ給ふ俗に石和の經石と云是也然は末代の今に到るも石の經文消失の

る緯實又佛智不思議の御徳ならずや亡者の成佛得脱云は勿論也水中に鮮鱗に到るまで之悉
く妙法の功力を蒙りて平等佛縁結ばせ給はる慈愛仰死て祖恩を報すべと也自是石和川を御立
有く北原と云里過り給ふ又側々太平坦ある大石有上人之に座をしめ説法し給ぬ斯て後金河原
の村又一宿し翌日は八代の郷に宿給ぬ上人毎夜更闌るまで讀經有折しも水無月上旬の緯に
て有心晝の暑熱とさせんとて宿れ庭の端居し給む蚊遣火焚て御座し處は前向の障の下に當
て一團の鬼火熾と燃出余側より人影立顯のれたり看れの變に遂に振亂きたる顔蒼ざりたる一團
の婦人兩人の嬰子を双手抱へ上人の御前に歩行寄唯潜然と突居たり者り上人御覽して問
宣く汝那者ぞ中宙に惑ふ手濁世輪廻の繼を離れず惡趣を執着すると思はれたか解脱の願
を願ふぞならば懺悔はべしと諭を給へば婦人上人を拜して稟しけるはあら有難の御尊ねやな
妾と該八代に郷の者なるが願恩をも不義の兩夫を襲ねし罪もや双子を孕り分娩と問もなく
母子續々て相果侍べる女の業障深きが上又異夫襲ぬる淫犯を以て三途の苦患は逃れ難く難に
善生道に陥んとし冀くは上人の法力を蒙り即得解脱の回向を受た々淺猿しるを願して稟

輝りしをも願ひ侍ると包す懺悔冥しければ上人此上なや不便に思され誦經懇切に唱導し給へば亡靈數度謝して立て行に上人看へ隠れ又迹追給へを一町余り間を隔たる郊原の樹下に竊導有り精靈行燈の影幽なる手向の栴檀枯野に季無常を示す虫の音と俱に鬼火も余姿も播消如く失るりけり偕に該新墓こそ余主おらんと上人新墓に對ひせ給ひ曉天來まで提婆品を誦し題目數百遍を授け給ふ○恚て亦翌日は其處を立信州諏訪郡葛木へ越彼處に兩三日遊化し給ふ而して亦甲州甘利に往再も波木井に還らせ給ふ于時今年六月十七日南部氏に營造處の新居普請全く落成せしかば上人身延山へ遷移せ奉る上人殊に御意に協ふを以て身延を西天靈鷲山に比せられ聊數年の苦辛を成め給ふ情往事を思ひ巡之給へと誦經觀念十年も猶夢の如しと或時上人和哥一首を詠じ給ふ

○立わさる射の浮雲も霞ぬべし妙の御法の慈の山かせ

是讀佛場の辭あり有り經より曰く棄恩入無爲と雖も上人今又父母を慕ふ心深く時々身延の絶頂より上りて遙に故郷の空を臨み給ふ夫大徳の愈至孝の人也孝成さる人は志遠す且遠ても終全

うらす故に孝の百善の基と云楮亦彼小室の修驗者は嚮上人は伏從去けれ其心理偏り憤り絶す如何として寒暄晴さばやと種々工夫を巡しけるが謀つて毒殺する如くへららす或日毒を餅と撰小豆砂糖を以て之を包み篋に入れて持來りつ、佗の印にとて供じたりけり上人心は怪を思し召は筆にて餅を狭探し庭に臥さる飼狗又汝試みよとて投遺給へば狗數を以て一口に喰へば忽ちさうりく骸を廻し苦聲を放けて血を吐出し漸打腦みて斃れ死しけり茲に於て修驗者蓋智毒の伎倆の顯れ口即罰己に覆るを知て胸の邪妄を皆懺悔して改心發起の御弟子と成覺し受戒得度みきて日蓮法師と云しは此人也上人狗の爲に浮圖を造り厚く吊ひ回向し給ふ恚て上人御化導多しが中より茲より一日の緯也けるが年齢十八九計りなる女尋常ならぬ美麗の容貌太わてやう成粧装して參詣して説法聽出なす各位是を何國の誰おらんと等しく怪しみ思ふ中より波木井の實長該座に在て深く之をば不審けるを上人察せられて婦人に對ひ汝速に元の姿を顯すべしと命せよ女畏りて曰様敷く之水を得させ給へと乞上人侍者を召て花瓶の水と鉢に汲把與へ給ふ婦人該水を得て影を流し一吸口へ入ぞと看へしが忽ち一丈計りの大蛇を纏じて花

瓶を三巻纏むて頭を揚火炎と等ら舌を出せば質長始め多くの聽衆疑惑は降ると雖も且驚き
目怖れて騒動す上人制して之を繪に模し永く身延の鎮護となるべしと宣ふ大蛇再び紫の婦人
と頼り上人に對ひて稟しざるに我往昔佛勅を蒙りて則ち佛法擁護をなす吉祥天の迹を垂たる
七面大明神と稟すは我緯也該西春木川の上と現する也自今後當山を守護して水火兵革の災難
無らし先ん亦無上菩提に回向せん人の諸願を満しむべしと誓畢て歸られみたり余花娘今猶御
山の祖師堂又有一日上人神女の畫像をば自筆に模寫して御剃髪を燒之を水解として粉色給む
相州の大野氏へ與へ給ふ當時同國小田原ある妙光院の什物とふれるよし時又文永十一年十月
五日對州府中に御鎮座在す八幡宮の神殿火失起りて卒然として炎燒ふ是徒に有べか
らずと國人恐怖危殆處に果して一大事件の騒亂發せり外國蒙古の大將たる世祖忽又列風州の
經零史折都高麗の軍民並官洪茶丘と命じて日本を劫し奪のんと謀り軍艦凡九百艘北海と連
り對州下縣郡佐須の浦へ押寄暴激最も傍若無人也翌れば六日壹岐對馬及び筑前肥前と攻懸と
けれは鎮西の軍兵之と接戰一戰爭利なく和軍の大將景隆資國兩將陣死なす蒙軍倍々威猛を

和民を多く虜となし一旦我國へ凱旋なしぬ然るに亦弘安四年正月右丞相阿刺罕左丞相范文
虎及び忻都洪茶丘等兵勢十方を引率へ日本を望み進軍すと聞へしり古城々々を屢に修理し
軍兵數十方を籠置つ、之を堅固に守らせたをけり亦山東の諸將を以ては皇都を厚く護衛せし
ひ然るに蒙古の軍艦三千艘海面の諸港に押寄あり諸國の大將之を引請力戰尽せ共支へ難く和
兵の損亡些からず総て九州路の軍卒諸民兇逆散て中國に奔り或は四國路と立退て安危を察
ひ天下の人民蹙倒怖畏て外夷の動亂何日か止んと唯恐る而已日を送けり時上人豫て斯有
んとは安國論も述給ひけれは蒙古退治の新構として新に重壇を築造有て兩面日月の御旗を
記注給ふ是八大龍王の大曼荼羅也今般蒙軍退治の大將たる惟康親王へ之を獻呈せんと宇都宮
貞綱を以て捧げらる惟康親王之を受給ひ弘安四年五月廿一日蒙古の軍に向ひせ給ふに奇なる
哉神風滔々と吹荒み大海の逆浪小山と打覆り蒙古の軍艦三千艘凡二十四萬の諸軍勢破船と成
て海に陥入一個も残す水屑と成けり稀代の妙法彌顯を神變不思議の高祖の御體亦感すべく
尊じべきなり今猶該内比日の丸御旗は東京最勝寺の靈寶とす亦月の丸の御旗に於て身延山久

遠寺の什寶也○備も歸依の道俗日々殖て別に一大堂閣を建立有其堂閣縱横六丈也是を昔々
て身延山久遠寺と云其年十一月廿四日普請全く成就せしむる當日則ち天台會を執行開闢
嘉祥とし給ふなり是が爲に遠近の道俗貴賤混じて法會を聚參上人の説法を承はりて普歡喜の
泪を抽潤し有りて翌弘安五年午年には上人御齡已六十一歳秋の初より御心地も何とな
例みらず思し召九月上旬に到りて弟子達集めて宣ひ給ふるは予思ふ處の有を以て武州池上
宗仲が許へ趣んとよそ志すなれ余準備すべと命を給へば倉長りて旅支度と違ふ南部氏に
上人の乗馬とて一匹の良馬を贈り進らせ長男彌三郎長義をして道中供奉に隨從せしめり
同月八日御發駕在まし其沿道の投宿處は

- (御立日) 下山四郎の館(九日) 大井の庄司(十日) 曾根の治郎(十一日) 黒駒某甲
 - (十二日) 河口上上の房(十三日) 吳地の遠山氏(十四日) 駿河の竹の下鈴木氏(十
 - 五日) 相州關本下田氏(十六日) 平塚長谷川氏(十七日) 瀬屋の精會(十八日) 正午
- の刻武州荏原郡池上右衛門 太 夫宗仲が邸にみそは着せ給ふ

上人當地へ來らせ給ふに疾病を治せんが爲也とて同廿五日安國論を講じ給ふ講じ果えて大
衆も告て宣く三七の内予當地に入滅すべし倘地震の是余證とせよ亦日朗も語れて曰く予死
しなば遺骸は於に必ず身延山へ送るべし亦上人波木井殿へは御書に曰く釋迦佛と天竺靈山よ
於て八箇年法華經を説給ふ御入佛は靈山より良又當る東天竺俱尸那國跋提河の西純陀が家に
て入滅有しか共八箇年法華經説給ふ山なれば御墳をば靈山お建らると也然る日蓮も斯の如く
身延山より良又當りて武藏國池上右衛門 太 夫宗仲が卜居來りて死すべく侍ふり假令何國
にて死すもわれ九か年の間心を安らかし法華經を讀誦せし山あれば墳墓を身延山お建置
べし心と未來際まで身延山止る日蓮と日本六十六か國嶼二個の内五尺足ざる身を一個置
處なく侍ひしと波木井殿の御育慈にて九か年の間身延山にて心靜し法華經勤修せしを余恩
志如何なる世も思ひ忘るべく侍はんや日蓮は日本第一の法華經行者也日蓮が弟子檀那等の
中より日蓮より後に來り給ふ侍ひは梵天帝釋四大天王閻魔法王の御前にても日本第一法華經の
行者日蓮房が弟子檀那也と名乗て通り給ふべし該法華經の三途川に船と成死出の山よてり

大白牛車亦冥途の燈火とも成靈山へ參る階と成べ—靈山良の隅よて尋ね給へ日蓮必き待稟すべく侍ふ但し各位信心に依べく信心弱くては日蓮の派下と云共冥府に御用む侍ぬまじ心に二念の疑ひ有れば阿鼻地獄へ陥るゝ必定也爾時日蓮を恨み給ふな返すぐも能々信心侍ふて異なる解なくば靈山へ在して日蓮を尋ね給へ其時精しく稟すべく侍ふ南無妙法蓮華經

○同年十月八日上人命せ有て上足六個を定先給ひ日與に命じて之を書し日昭日期日與日向日頂日特是也上人即ち遺言して宣く汝六子之吾門の上首より護法に身命を惜ひべからず亦衆人に示して六子を吾如く思へども同く十三日の曉天大地俄に震動す須乎證しよと諸弟子達集り來りて教への如く上人を西面頭北又臥せ奉り衆と共に方便品を誦し既に入佛智知見道故の句に至れて睡るが如く入寂玄給ふ上人世壽六十一歳法臘四十六年葬式を行ひ山中に關維し十六日遺骨を身延山へ送り奉る

高祖日蓮大菩薩御詠哥 ○自うら邪又降る雨のあらじ風よそ夜の恣をうけらめ
日蓮大菩薩眞實傳全畢

高祖御詠歌 梁牌の本尊 霜柱氷は梁よ雪の桁さよゆ々水に火こそ消され

同 讀佛場辭 立渡る身の浮雲も晴ぬべし妙の御法の霧の山風

同 上總於笠森 憂に降る泪の雨に濡じとて茶ふ笠森を身又着ける哉

明治十四年十一月十九日 出版御届

大坂府平民

編輯人 大坂府平民 友 鳴 吉 兵 衛

北區天滿川崎町第三拾八番地

大坂府平民

華 本 安 次 郎

東區北久寶寺町三丁目卅四番地

出版人

日蓮大菩薩眞實傳

十一華本文昌堂藏版

大白牛車亦冥途の燈火とも成靈山へ參る階と成べ—靈山長の隅にて尋ね給へ日蓮必ず待梨
 すべく侍ふ但し各位信心に依べく信心弱くては日蓮の派下と云共冥府に御用む侍ぬまじ心
 に二念の疑ひ有れば阿鼻地獄へ陥るの必定也爾時日蓮を恨み給ふな返すべくも能々信心侍ふ
 て異なる辭なくば靈山へ在して日蓮を尋ね給へ其時精しく稟すべく侍ふ南無妙法蓮華經
 ○同年十月八日上人命せ有て上足六個を定先給ひ日與に命じて之を書し日昭日朝日與日向
 日頂日特是也上人即ち遺言して宣く汝六子と吾門の上首より護法に身命を惜むべからず亦衆
 人に示して六子を吾如く思へとあど同く十三日の曉天大地俄に震動す須乎證しあそと諸弟子
 達集り來りて教への如く上人を西面頭北に臥せ奉り衆と共に方便品を誦し既に入佛智知見道
 故の句に至れて睡るが如く入寂之給ふ上人世壽六十一歳法臘四十六年葬式を行ひ山中に關維
 し十六日遺骨を身延山へ送り奉る

高祖日蓮大菩薩御詠哥
 ○自りら邪に降る雨のあらじ風も夜の窓をうほらめ

日蓮大菩薩真傳全畢

高祖御詠歌 梁牌の本尊 霜柱氷に梁よ雪の桁さよゆ々水に火こそ消され
 同 讀佛場辭 立渡る身の浮雲も晴ぬべし妙の御法の慧の山風
 同 上總於笠森 憂に降る泪の雨に濡じとて茶ふ笠森を身又着ける哉

明治十四年十一月十九日 出版御届

一七九五五

編輯人

大坂府平民

友 鳴 吉 兵 衛

北區天満川崎町第三拾八番地

出版人

大坂府平民

華 本 安 次 郎

東區北久寶寺町三丁目卅四番地

